

南丹・壺ノ谷窯址出土のミニチュア農具形須恵器

門 田 誠 一

一 壺ノ谷一四号窯址出土スキ・クワ先形須恵器

佛教大学は京都府船井郡園部町に約三六万平方メートルの校地を有している。ここには遺跡地図に記載されているいわゆる周知の遺跡として、古墳二基、窯址一〇箇所があることが知られていた。この校地を造成し、活用するのに先立ち、大学では校地等学術調査委員会を設けて、これらの遺跡調査を行うことになり、一九九三年より、詳細な遺跡の分布調査を皮切りに、考古学調査を開始した。その後、窯址やこれと関連すると思われる地点については、すべて発掘調査を実施した。その過程で、実際に窯址であると判明したものは九箇所であった。これらの窯址からの出土遺物は遺物整理箱七〇〇箱以上にものぼったが、破片を除く資料は、すでに二〇〇〇年に報告した¹⁾。

それらの遺物のなかから、ここでは壺ノ谷一四号窯址から出土した須恵室のU字形スキ先を模したミニチュアを紹介したい。須恵器のミニチュアとしては容器類や手づくね製品があることが知られているが、農具を模した

例は稀少であることが、ここに資料紹介を行なう所以である。対象とした資料は刃部がU字形のスキ・クワ先を模した須恵質の遺物である。この遺物が出土した壺ノ谷一四号窯址は、一二、一三号窯址と同じ斜面の一番南側にある地下式の窖窯である。岩盤をくり抜いて造られており、天井は全て崩落していたが、その他の部分は比較的に残りが良く、全長九・二メートル、最大幅は一・六メートルであることが判明した。煙道部分は煙突状に地上へ向かって延びており、高さ約一・六メートルの奥壁がある。窯体内部の壁面には窯体構築時のものと思われる岩盤をくり抜いた際に用いた利器の刃の痕跡が残存していた

一四号窯址から出土した須恵器は山田邦和氏の編年による三期初頭であり、実年代は七世紀前半頃に比定される^②。すでにふれたように一四号窯址からは、一般的な須恵器の器種のほかに実物の農具であるスキまたはクワの刃を雛型として製作した遺物が出土した。この種の農具は着柄の角度が柄に対して、直角ないしそれに近い角度か柄と水平かということによって名称ないし種類が異なり、一般に前者はクワ、後者はスキと呼ばれることが多い。よって、刃先のみでは区別が難しいため、ここではスキ・クワ先と呼んでおく。また、スキやクワの漢字は、時代や地域または慣用的にも多様であるため、スキ、クワの表記を用いる。

壺ノ谷一四号窯址から出土したスキ・クワ先形須恵器は長さ六・三センチメートル、幅五・五センチメートル、厚み〇・九センチメートルで、刃部幅が二・五センチメートルである。刃部とは反対側にもつとも深い部分で〇・五センチメートルのV字形の溝があり、断面形状からみて成型後に施されたと思われる。実物のスキ・クワ先では、木部を装着するために強度が必要な部分であるが、これに比して、簡単に粗雑であり、当然ながらミニチュアとして整形されたことを示している。刃先は薄く作られ、先端部は一ミリメートルである。両面ともに表面全体に指頭による圧痕がみられ、手づくねによる整形であることがわかる。

色調は濃灰色を呈し、壺ノ谷窯址群で出土した須恵器と同様であり、また、須恵器一般に通有な色合いである。胎土は精良で、夾雑物は少ないが、わずかに長石粒とみられる白色微粒が含まれる。焼成に関しては、一四号窯址土遺物のうちの焼成良好な一群と比較すると、やや軟質の焼成であるが、胎土、焼成ともに壺ノ谷窯址群出土の須恵器と同様な質感を呈している。

二 ミニチュア農具形須恵器の意味―実物のスキ・クワ先出土例を参照して―

須恵器のミニチュア製品と同じ類型とされる手づくねの製品は、日本列島における須恵器焼成開始時期に位置づけられる山隈窯址（福岡県朝倉市）でも出土していることから、須恵器生産の当初より行われていたことが知られる。⁽³⁾しかしながら、農工具を模した製品は、これに続く須恵器の展開過程のなかでも、顕著ではないどころか、稀有な例といえる。

他方、古墳時代には農工具のミニチュアとして、主として鉄器と滑石製模造品があり、そのうち前者すなわちミニチュア鉄器については、とくに実用に不適な一群は朝鮮半島の加耶地域から移入された習俗と考えられる。とりわけ、三国時代の朝鮮半島から移入された鉄器であるとされるU字形スキ先に関しては、鉄器ではミニチュアが認められるのに対し、祭祀遺物として在来の器物が模された滑石製模造品には認められない種類であることも、U字形スキ先が渡来系の器物であることと関係していると考えられる。

このようなU字形スキ先に先行する弥生時代の青銅製スキ先については、墓壙の掘削に伴う祭祀行為に関連する遺物であるという説があり、⁽⁴⁾古墳時代に先立つ農具の祭祀への利用として位置づけられる。その後、古墳時代

中期にU字形スキ先を主とした農工具が朝鮮半島から移入されて以降、古墳の埋葬施設とその周囲だけでなく、周溝や盛土内からも、農工具が出土することがある。これに関しては、一九九五年の時点で、鉄製農工具出土古墳の詳細な集成が行われている。とくに墳丘裾屋や封土内部から出土する例については、古墳の実際に築造行為に用いられた道具が埋納されたものという見方が示されている^⑤。

その典型として、根田一号墳(千葉県市原市・全長約三三メートルの帆立貝式古墳・六世紀中頃)では、墳丘構築時の地山面から鉄製U字形スキ・クワ先が出土した^⑥。また、大日山古墳(千葉県成田市・全長五四メートルの前方後円墳・五世紀中頃)では墳丘南側のくびれ部裾から鉄製袋状鉄斧が出土した^⑦。これらは実際に墳丘の造成に使用されたか、あるいはそのような行為に伴う所作儀礼に用いられた可能性が指摘されている。

いっぽう、木質部を含む完形のスキが出土した遺跡の典型として、南六条北ミノ遺跡(奈良県大和郡山田市)があげられる。ここでは一辺約二〇メートルの正方形の区画の周囲に溝が掘られている遺構が検出され、方形周溝墓と推定されている。この溝の四隅からは多数の木製農具が出土した。具体的には、北西の隅からスキが一点、北東の隅からスキが一点、クワの柄が一点、南西の隅からスキが二点、南東の隅からナスビ形スキが二点、スキが四点で、合計一三点の農具が出土した。これらの農具は溝内に廃棄されたのではなく、溝の四隅に据え置かれた状態のままで出土した。東側の溝からは、土を運んだとみられる一一個の籠と天秤棒も出土している。上記の鋤や鍬とともに籠や天秤棒も同時に出土したことで、これらの農具は溝の掘削に使用した道具としてセットで埋められたと考えられる。これらの農具の所属時期は四世紀後半頃と推定されている^⑧。

このような墓に伴う祭祀とは別に、楠葉東遺跡(大阪府枚方市)では、木炭を充填した約三〇センチメートル四方の区画に刃先を上にしたスキを立て、これに小型の水瓶形須恵器を添えて置いてあった。この須恵器の中から

は、天徳二年（九五八）初鑄の乾元大宝一〇点が出土したことから、一〇世紀後半頃の遺構とみられる。この遺構に接して、墓などは存在しないことから、ここでは地鎮の目的で、スキを立てる祭りが行われていたと推定されている。^⑨

建物の築造に関して農具が使用されていた遺構の典型例として、尾尻西立野遺跡（神奈川県秦野市）をあげておこう。ここでは奈良〜平安時代（八世紀半ばから九世紀末）の掘立柱建物の柱跡に接して、完形の鉄製スキ先が出土しており、地鎮ないしは建物の築造に伴う祭祀に関係する器物として鉄製スキ・クワ先が用いられていたと推定されている。^⑩

代表的な例をあげてみてきたが、これらに限らず、弥生時代以降、スキを含む農工具ははたんに実用品としてのみならず、墓の造営に関する儀礼や壺・錢貨を伴う祭祀行為にも用いられていたことは研究史が述べるところであって、ここで再論するまでもない。このような古代における農工具に関連した祭祀遺物として、本論では壺ノ谷一四号窯址で出土したU字形スキ先を模したミニチュア須恵器について資料紹介を行うことによって再提示した。今後、類似の資料が注目され、窯業製品としての祭祀用具に関するさらなる研究の質的な展開にやささかでも資するところがあれば、この小稿も鶏肋たりえよう。

注

（１） 佛教大学校地（文化財等）調査委員会編『壺ノ谷窯址群・桑ノ内遺跡発掘調査報告書―京都府園部町所在―』佛教大学、二〇〇〇年

（２） 山田邦和『須恵器生産の研究』学生社、一九九八年

（３） 舟山良一ほか編『須恵器集成図録』第5巻西日本編、雄山閣出版、一九九六年、二二―二四頁

(4) 柳田康雄「第Ⅱ部第二章 青銅製鋤先」『九州弥生文化の研究』学生社、二〇〇二年

(5) 田中新史「使用具の古墳埋納(上)」『古代』九八、一九九四年

田中新史「使用具の古墳埋納(下)」『古代』一〇〇、一九九五年

(6) 田中新史「古墳の調査」市原市教育委員会編『上総国分寺台発掘調査概報(昭和55年度)』市原市教育委員会、一九八一年

(7) 大日山古墳調査団編『大日山古墳』千葉県教育委員会、一九七一年

(8) 奈良県立橿原考古学研究所『大和郡山市八条北遺跡・天理市南六條北ミノ遺跡発掘調査現地説明会資料』(二〇〇三年一〇月四日)

(9) 枚方市文化財研究調査会編『枚方市における遺跡調査概要1988～1995』枚方市文化財研究調査会、一九七六年

枚方市文化財研究調査会編『枚方市文化財年報』枚方市文化財研究調査会、一九八〇年

瀬川芳則「スキを立てるまつり」森浩一編『考古学と移住・移動』同志社大学考古学研究室、一九八五年

(10) 西大竹尾尻遺跡群発掘調査団編『西大竹尾尻遺跡群4―資料Ⅲ―』、西大竹尾尻遺跡群発掘調査団、二〇〇一年

西大竹尾尻遺跡群発掘調査団編『西大竹尾尻遺跡群1』西大竹尾尻遺跡群発掘調査団、二〇〇三年

富永樹之「神奈川県における奈良・平安時代の祭祀遺構と遺物」相模の古代を考える会編『論叢古代相模』相模の古代を考える会、二〇〇五年

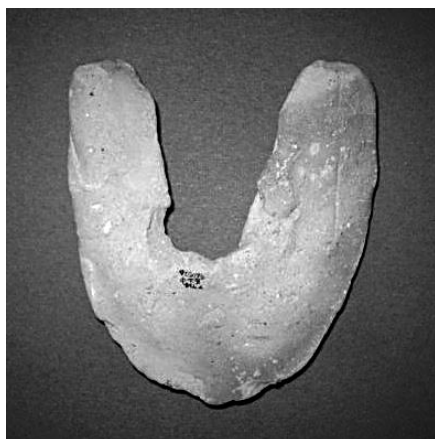


写真1 壺ノ谷14号窯址出土ミニチュアスキ・クワ先形須恵器

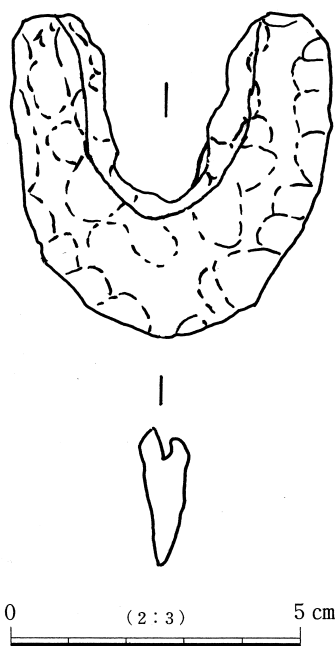


図1 壺ノ谷14号窯址出土ミニチュアスキ・クワ先形須恵器